

Beyond 5G 推進コンソーシアム 企画・戦略委員会 ビジョン作業班（第4回）議事要旨

1. 日 時： 令和3年7月20日（火）15:00～18:00
2. 場 所： ウェブ会議（WebEx）
3. 出席者：
中村主査（NTT ドコモ）、
ビジョン作業班 小西リーダー（KDDI）、永田サブリーダー（NTT ドコモ）、
技術作業班 中村リーダー（富士通）、下西サブリーダー（NEC）、
WP5D 対応 Ad hoc 菅田主査（KDDI）、武次副主査（NEC）、
ほか、通信事業者、メーカ等、計74名
（事務局）総務省移動通信課新世代移動通信システム推進室
井出室長、江原課長補佐、丸橋係長、守屋係長、杉山官

4. 議事要旨

冒頭、会議開催に先立ち、小西リーダーから挨拶があった。

（1）前回会合（第3回）の議事要旨について

事務局から、資料1 ビジョン作業班第3回議事要旨について説明。修正があれば、7月23日までに事務局へ連絡してほしい旨説明。

（2）提案各者の説明について

提案各者からユースケースのプレゼンテーションを行った。質疑応答は以下のとおり。
なお、提案各者から申し出があった場合は、発表資料及び内容は省略することをメンバーで確認した。

① 社会福祉法人善光会 宮本氏『介護現場のDXと2030年を見据えた展望』

医療未来学者奥氏：実際どのくらいの介護を担う人間がロボットに置き換わると想定しているか。

善光会宮本氏：約3～4割の業務が置き換わると予想している。しかし、クリエイティブな要素も多いため、介護の仕事が全てロボットに置き換わることはない。定常的な業務がスマート化できると考える。特別養護老人ホームの利用者：職員の配置割合は、全国平均は2：1だが、弊社は2.8：1であり、数字としても表れている。

KDDI 菅田氏：介護を受ける側の人間に対して、個人の感情とのチューニングをどこまでAIで行うのか。また、個々にしようとするとう情報量が膨大になることが予想されるが、どのように管理していく予定か。

善光会宮本氏：今のAIは、今まで職員が目視で確認しなければならなかった情報を感知している。個々人に合わせたチューニングは想定していない。例えば、ベッドのずれや心拍数を測る際に活用している。データ量の増加は、現状でも課題になっているため、今後改善に期待したい。弊社だけでなく、プラットフォームを活用するなど業界全体で取り組んでいる動きもある。

三菱電機長谷川氏：DX化によって、現状の介護が楽になるのか、それとも介護のやりかたそのものが変わるのか。

善光会宮本氏：両方を想定。現在の仕組みについても見直しが必要であるが、介護のあり方そのものが、この5～10年間に変わる可能性はある。

② 東日本旅客鉄道株式会社 天内氏『「空間自在」プロジェクトについて』

鉄道総研中村氏：実証実験のポイント。WEB会議との違いを教えてください。

JR 東日本天内氏：離れた場所でチーム同士の会話が可能か、生産性が上がるか、感情の揺らぎや無表情の時間が少なくなるかといった点について焦点を当てた。実験の結果、会議の生産性が上がり、感情をフィードバックしやすい点がポイントであった。

KDDI 菅田氏：リアル空間とバーチャル空間を相互にうまくつなぎあわせることが必要だと感じた。

JR 東日本天内氏：不動産開発は建物という容積の中でしか事業が成立しないため、その容積を如何に増やすかが重要。そのためにバーチャル空間の活用は非常に有効。一方で、リアル空間では、より付加価値があるものを構築したい。バーチャルとリアルが競い合えるような環境が理想。

③ 一般社団法人日本CFA協会 塚本氏『2030年の金融』

科学技術振興機構高島氏：CBDC（中央銀行デジタル通貨）が一般的になると、クレジットカードや電子マネーも不要になるのではないかと。手元資金がある人は、分割払いもしないと思うため、クレジットカードも不要になるのではないかと。

CFA協会塚本氏：そういう流れになると思う。クレジットカードは分割払いなど手数料が取れる分野に注力するのではないかと。

小西リーダー：証券取引について。グローバル化が進むにつれて、競争優位性が何から導かれると想定しているか。

CFA協会塚本氏：超高速取引が増えてきているが、フラッシュクラッシュ（事務局注・株式市場等における瞬間的な暴落のこと。）のような事案が頻発することは良くない。取引が速くできれば良いというものでもなく、安心安全に取引が担保されていることが、取引所としては重要なので、スピードのみで競争優位は決まらないと思う。また、上場している企業の魅力を高めるようにすることも大切。

④ 株式会社フジテレビ 清水氏『6G×2030年のテレビ』

中村主査：8Kや高解像度、AR、VRの話がなかった。あまり将来の展望として重要ではないと感じているのか。

フジテレビ清水氏：8Kについても、高度な技術で来るべき進歩ではあるが、個人的にはイノベーションの軸ではそこまで必要と感じていない。AR、VRは5Gの世界でも当たり前になると思い、あえて話に出さなかった。今回は6Gの視点で考えた。

中村主査：デバイスへの展望は如何。

フジテレビ清水氏：理想はデバイスがなくても、窓ガラスに投影したり、衣服をデバイスにしたりすること。いつでもどこでもデバイスでつながる世界が理想的である。いつでもどこでもデバイスを使わずに360度投影できる技術が主流になると予想。

⑤ 医療未来学者 奥氏『医療 WITH 6G』

中村主査：医療に関する個人データの扱いに関する規制や医療機関内でのシェアについての規制があると思うが、今後はどのように変化するとお考えか。

医療未来学者奥氏：情報がどこまで行き届くか分からない点に注意が必要。個人の医療情報が海外企業へ流出し、悪用されてしまうことへの懸念は根強くある。数年前に、ようやくクラウド上に医療データを保管してもよいと制度が変わったところであり、個人データを病院の中のみ留めなければならないという状況は解消された。これは、患者が受診する時点で、一定の制約下で最低限の個人データが活用されることに合意したという基本的な考えによるもの。

(3) ディスカッション（各者の説明や白書の目次案）について

本日のプレゼンテーション内容について質疑応答や意見交換を行った。内容は以下のとおり。

中村リーダー：金融業界に関し、技術面でより改善してほしい点はあるか。

CFA 協会塚本氏：ビッグデータはあるものの、データを活用できていない現状がある。今後も、ビッグデータを活用することが求められる。

CTC 佐藤氏：企業間、異業種間を超えて、データの流通や交換が発生し得るかどうか皆に聞きたい。

CFA 協会塚本氏：実際の事例では、人間ドックと生命保険の保険料の計算に使われている。生命保険料に関して言うと、今後、より個人にマッチした情報や保険料の提示ができるようになると思う。

医療未来学者奥氏：生命保険料に関しては制度の面が関係している。今の日本では、国民保険と個人の保険が不完全な形でオーバーラップしている。技術的な面では、データを共有することは可能だと思うが、高いコストをかけてまで行うことではないと思う。

善光会宮本氏：介護と医療は切れない関係だが、使っているシステムが介護と医療では異なる。介護システムの情報そのままでは、医療には使えず、連携ができていない。

情報のやり取りについても、紙や FAX でやりとりをしているため、非常にコストがかかる。介護から医療、又はその逆に情報を連携しても歯抜けのデータになることも多いため、今後改善する必要がある。

三菱電機長谷川氏：本日の話は日本特有のものか、国際的に共通の話か。

フジテレビ清水氏：2021 年の状況の説明は、日本に関する話。海外では、日本と比べチャンネル数が多く、放送法の規制等が大きく異なる場合もある。例えば、ドイツでは、同時再送信として 5 G で映像コンテンツを伝送する実証実験も進められている。日本の場合は、チャンネル数が多くないこと、また、日本語という言葉の壁もあることから、2030 年でも今のビジネスモデルのままでやっていける部分もあるのかなとは個人的に思う。ただ、日本は今後人口減少が進むことから、デジタルと海外に積極的に打って出ないといけないと考えており、海外向けにフォーマットセールスを行ったり、海外と共同でドラマ制作をしたりといった取組を進めていくこともフジテレビではすでにかなり力を入れている。

JR 東日本天内氏：日本と比較すると海外の方が拠点を分散化する動きが活発である。海外では、Amazon のように拠点を複数構える動きも見られるが、日本のように小規模で過密な状態は、より通信の発展に期待ができる。5 G から 6 G に変わることによって、人間が知覚できる範囲を技術が超えることはあるのか。

フジテレビ清水氏：テレビでは、知覚できないかもしれないが、映画館のような大きなモニターでは、より精彩に見える。5 G、6 G が発展することで、通信速度やスマートフォンなどのデバイスでより精彩に見えるようになることは良いことだと思う。

医療未来学者奥氏：本日提示したものは国際的な課題と想定している、しかし、制度の違いにより、日本の課題はそのまま海外の課題とイコールではない。介護保険は、まだ見直しの余地がある制度に見えるため、自動化、AI 技術の活用によりコストを削減することは重要。医師法も非常に古い制度のため、今後時代の動きに制度側がついていけない点が考えられる。

日本 CFA 協会塚本氏：日本はキャッシュレスの動きが海外と比べて遅い。日本は全てのサービスが満遍なくあるため、新しいサービスに移行するのが遅いように感じる。

(4) 今後のワークショップと白書執筆の進め方について

小西リーダーから、資料 3 白書の目次案について説明。目次案の業界ごとの執筆担当者（案）を提示。担当の変更希望があれば、7 月 26 日の週中に連絡してほしい旨説明。質疑応答は以下のとおり。

クアルコム武田氏：各者のプレゼンを聞いて作成すると思うが、発表内容によっては、情報があまりないものがある。その場合、どのように作成するべきか。

永田サブリーダー：あくまで各者のプレゼンは参考のため、必ずプレゼン内容を白書に盛り込まなければならないわけではない。

中村リーダー：作業スケジュールを今一度確認したい。

小西リーダー：8 月に目次案、12 月に 0.5 版、3 月に 1.0 版を作成予定。

永田サブリーダー：8月に目次案、分野を決め、各者に内容について相談したい。12月
末までに一旦、各者にドラフト版を作成してもらって全員で確認したい。

中村リーダー：承知した。

(5) その他 次回会合について

事務局から7月27日(火)に第5回ビジョン作業班を白書分科会と合同開催である旨説明した。

以 上